子ども用一般感情尺度の作成（2）

— 実験的検討による尺度の妥当性の検討 —

○手塚洋介¹・福田美紀²・鈴木直人²

(¹大阪体育大学・²同志社大学)

キーワード：子ども用一般感情尺度・構成概念妥当性

Development of the General Affect Scales for children (2): An experimental examination of construct validity

Yosuke TEZUKA¹, Miki FUKUDA² and Naoto SUZUKI²

(¹Osaka University of Health and Sport Sciences, ²Doshisha University)

Key words: General Affect Scales for children, construct validity

目 的

学校生活で起こる問題行動は、日々の出来事に伴う感情体験と関連すると考えられる。そのため、子どもの感情に注目することは、子どもの行動を理解しサポートする上で有用なアプローチとなる。これまで、ネガティブ感情やストレス反応に注目した研究が多数行われてきた一方で、ポジティブ感情との関連性はほとんど検討されておらず、感情全般との関連性はいまだ不明な現状にある。子どもの感情を測定するための適当な尺度が開発されてこなかったことが一因にあることから、福田・手塚・鈴木（2012）は、子ども用一般感情尺度を作成した。この尺度は、“ポジティブ感情”、“安静状態”および“ネガティブ感情”の3下位尺度で構成されている。特徴としては、活性度の異なる2つのポジティブ感情が測定できる点であり、本尺度を通じて子どもたちの感情状態を詳細に記述できると期待される。

本研究では、活性度がより高い“ポジティブ感情”と活性度が低い“安静状態”とそれぞれ強く関連すると考えられるアクティベーションおよびリラクセーションを実験的に施し、尺度の構成概念妥当性の検証を試みた。また、児童と成人とを比較することで、条件の違いに対する児童の回答の適切性も検討した。

方 法

参加者 小学4年生から6年生の児童14名（男子8名、女子6名、10.71歳±1.10歳）と教員や保護者などの成人11名（男性2名、女性9名、41.91歳±9.77歳）を対象とした。全員が同時に以下の各条件を実施した。

条件 アクティベーションとして“しっぽとり鬼ごっこ”（日本レクリエーション協会、2006）を実施した（以下、鬼ごっこ条件）。これは、参加者の腰部に付けたポリエチレン製テープのしっぽ（幅5cm、長さ約30cm）を互いに打ち合うもので、身体活動を含むためアクティベーションの強度が比較的高いと考え採用した。2分間行った後2分間休憩し、再度2分間行った。リラクセーションは、倉戸（1999）や新畑・関矢（2001）を参考に独自の呼吸法を仰臥位で実施した（以下、呼吸法条件）。“鼻から大きく息を吸って、お腹が大きくなるのを感じましょう。これ以上吸えなくなったら、少し息を止めて、ゆっくりと口から息を吐きましょう。お腹がぺったんこになるのを感じてください。では、やってみましょう。はい、吸って、息を止めて、ゆっくり吐きましょう。”と教示し、初めの数回は教示に合わせ、その後各自のペースで3分間実施した。

指標 子ども用一般感情尺度（福田他、2012）を用いた。15項目（各下位尺度5項目）について、現在の自分に当てはまる程度を“まったく感じない”（1点）から“とても感じる”（4点）の4件法で回答させた。

手続き 実験は小学校の教室および芝生の校庭で行った。参加者は、教室にて実験の説明を受けた後、1回目の尺度に回

答した（以下、安静条件）。続いて、校庭に移動し“しっぽ取り鬼ごっこ”を実施した後、2回目の尺度に回答した。最後に呼吸法を行い、3回目の尺度に回答した。

結 果

図1に、児童および成人の各下位尺度の平均を示した。“ポジティブ感情”は、児童と成人いずれも安静条件から鬼ごっこ条件にかけて得点が増加した。呼吸法条件では、児童は得点が減少したが、成人は値がそのまま推移した。参加者（児童、成人）×条件（安静、鬼ごっこ、呼吸法）の分散分析の結果、両主効果および交互作用が有意であった（ $F_s(2, 46) < 12.64, p < .01$ ）。“安静状態”は、児童と成人どちらも、安静条件と比べて鬼ごっこ条件で得点が減少し、呼吸法条件で増加した。分散分析の結果、条件の有意な主効果が認められた（ $F(2, 46) = 71.71, p < .01$ ）。“ネガティブ感情”は、鬼ごっこ条件のみ他の2条件よりも有意に高い得点だった（ $F(2, 46) = 21.63, p < .01$ ）。

図1 各下位尺度の条件別の平均（標準誤差）

考 察

児童の結果をみると、アクティベーションに伴い“ポジティブ感情”が増加し“安静状態”が減少したのに対し、リラクセーションでは逆の変化を示しており、予測通りの結果が得られた。成人の結果も児童とほぼ同様であったことから、児童は条件の違いを適切に区別できていたと考えられる。また、呼吸法の結果は、本研究と同じ尺度を使用しイメージ呼吸法の効果を検証した福田・若畑（2009）と類似していた。他方、鬼ごっこ条件において“ネガティブ感情”が増加したのは予想外であったが、これは他者との競い合いという条件の性質が“どきどきした”や“あせった”などの項目の得点に反映したのだと思われる。本研究の結果から、子ども用一般感情尺度は条件の違いを適切に反映すると解釈でき、尺度の構成概念妥当性が確認されたといえよう。